

左京三条一坊一・二坪の調査

—第478次

調査経緯

平成20年の国営歴史公園化以後、平城宮跡では国土交通省による整備事業が開始されている。この計画の中で、平城京左京三条一坊一には「平城宮跡展示館」の建設が予定されている。本調査は、その建設の事前調査であり、遺構面の高さや遺構の残存状況を確認することを目的として実施した。

調査区は、左京三条一坊一・二坪の東半に位置する。調査面積は1,030㎡（南北103m、東西10m）、調査期間は2010年12月8日から2011年3月30日までである。

周辺の調査

調査地の西隣は、史跡平城京朱雀大路跡で、奈文研や奈良市教育委員会などによって、朱雀大路東側溝を中心とした発掘調査がおこなわれている。これらの調査では、三条条間北小路や左京三条一坊一坪を南北に二分する東西方向の坪内道路を検出している。また、二坪では、外周を廻る築地塀を確認しているが、一坪では遮蔽施設は確認されておらず、平城宮朱雀門にもっとも近接したこの坪の特殊性が注目されていた。

調査成果

調査地は、史跡朱雀大路跡の整備にともない、約20mの盛土が施されている。この盛土の直下に旧地表面があり、それより下位は、旧耕作土、床土、遺物包含層と続き、奈良時代の遺構面となる。以下、検出した遺構の概要を示す。

調査区の南端では、三条条間北小路の南北側溝を検出した。奈良市教育委員会による321次調査（1995年）で検出した遺構の延長部分にあたる。三条条間北小路の南北側溝の心の間距離は6.2m、路面幅は4.3m程度となる。また、調査区南壁では、埋土に瓦片を多量に含む東西溝を検出した。同じく奈良市321次調査で検出した遺構の延長部分にあたり、この東西溝と三条条間北小路の間に、二坪の北面を限る築地塀が想定されている。今回の調査では、東西溝や遺構面を覆う遺物包含層より多量の瓦片が出土しているが、版築層など築地塀自体の痕跡は確認できなかった。

調査区の中央付近では、三条一坊一坪の坪内道路南北

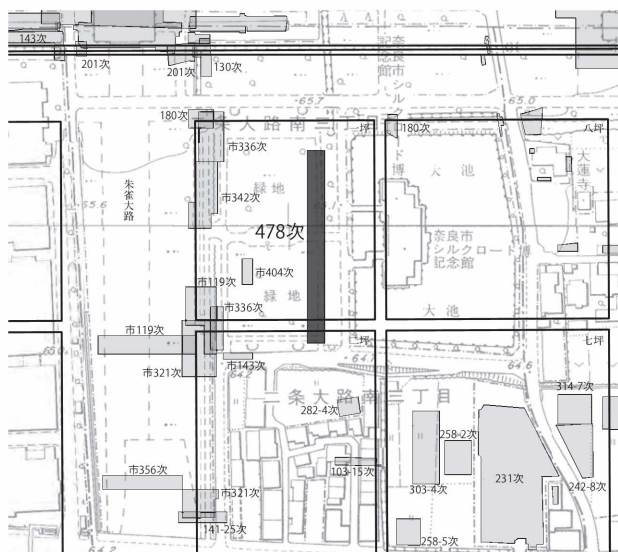


図265 第478次調査区位置図 1:4000

側溝を検出した。同じく、西側の奈良市336次調査(1995年)で確認した遺構の東延長部分にあたる。側溝の心の間距離は9.5m、路面幅は8m程度とみられる。

調査区の北辺では、少数ながら掘立柱建物を検出した。調査区東壁で検出した建物は、径1.7～2.1mの掘立柱の柱穴が南北に3基並ぶ。南面に廂が取り付く東西棟建物の西妻部分とみられ、妻柱のみ礎石建の可能性もある。妻柱があったとすると、梁行2間で柱間寸法は3.0m（10尺）、廂の出は2.7m（9尺）となる。この柱列のすぐ北西で、同じく掘立柱の柱穴3基が南北に並ぶ。これも東西棟建物の西妻部分とみられるが、廂はない。柱間寸法は3.9m（13尺）等間。これらの建物遺構の年代を裏付ける遺物は出土していない。

この他、坪内道路の北側で大型の井戸1基を検出した（図267）。この井戸は上下2段構造で、上段は内法2.41～2.46mの正方形、下段は一辺1.08mの六角形の平面を呈する。上下段とも、隅に柱を立て溝を切り、その溝に横板を落とし込む構造である。上段は井戸枳材が抜き取られ土居桁のみが残存する。下段は直径15cmの丸太材を隅柱とし溝を彫り、幅約1.0cm、高さ30cm内外、厚さ6cm程度の板材を7枚落とし込む。上段の土居桁と下段の上面との間には拳大の礫を敷く。深さは、遺構検出面から上段土居桁底面までが約60cm、下段上面から下段の底までが約2.1mである。井戸の規模や構造から、この井戸を設けた場所の重要性がうかがわれる。

出土遺物

調査区全体からの遺物の出土量は少ない。井戸の埋土からは、奈良時代後半の土師器をはじめとして、須恵器、墨書土器、瓦、木製品、金属製品、木簡など、多彩な遺物が出土している。詳細は今後の整理作業を待ち、改めて報告する予定である。

（大林 潤）



図266 調査区全景（南東から）



図267 井戸完掘状況（西から）